



第49号  
中央大学学生会  
国立支部  
発行者 小島泰義  
042-575-1454

### 第二十八回 総会を迎えて

支部長 小島泰義



平成二十五年六月に就任し、早くも二年の任期を迎え会員の皆様のご協力で二期目の総会を迎えることが出来ました。これも会員、役員の皆様のご協力の賜物と、衷心よりお礼申し上げます。

私個人もいろいろな会に参加し、思うように時間が取れない状況のなかにもかかわらず、幹事長をはじめ皆様にご迷惑をおかけしながらの二年間であったと深く反省いたしております。

このような中、二年間の事業も横浜のホテルでの一泊旅行、新潟県津南町で開催される「どぶろく祭り」への一泊旅行、ボウリング大会、夏の昭和記念公園のバーベキュー、市民まつり、箱根駅伝予選会での二年つづけての応援など、思い出多き二年間でもありました。

当白門会は同窓会員として地域に居住し、地域に密着した活動を行い地域発展の一助となるよう企画、運営を進めて行きたいと思っております。

また、今後は会員相互の親睦を深め、楽しいひと時を持つ機会の創設が必要だと思えます。また、母校発展のために会員がひとつになって大学関係者との交流の推進を図ると同時に、近隣支部の皆様とも連携をさらに深め、積極的交流を図っていく所存です。

今後、白門会の行事等に多くの会員の皆様にご参加いただくことが会の発展につながることを考えておりますので積極的にご参加くださいますようお願い申し上げます。

最後に会員皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

### 平成二十六年年度 第三十七回 定時総会

平成二十六年年度定時総会が、平成二十六年六月十五日(日)午後三時より、国立駅前せきやビル七階「エソラホール」にて開催された。重野和夫顧問の司会のもと、冒頭に小島泰義支部長の挨拶があり、阿部正行監事が議長に選出され、審議となった。上田邦雄幹事長から第一号(事業報告)、第二号(事業計画案)、下村俊郎会計から第三号(決算報告)、第四号(会計予算案)が発表され、すべて満場一致で承認された。

学員会から 正野建樹副会長、近隣支部から 栗山博樹 日野支部長、出口純輔 小平支部長、江田功 小金井支部副会長、新谷真秀 府中支部幹事長の各氏にご来賓としてご出席を賜り、ご挨拶をいただいた。

正野学員会副会長は、母校の活動の様子や、いろいろな問題点などのご説明をお聞かせくださり、近隣支部の方々からは、国立支部の活発な活動状況に対するお褒めの言葉と、暖かい励ましのお気持ちを頂戴した。

平本聖子 記



# 『海の日』は恒例の納涼会

七月二十一日(海の日)昭和記念公園バーベキューガーデンで納涼会を開催した。テレビの天気予報では「一日曇り」でした。窓の外は「どんより」とした空模様。予想が好転することを願いながら家を出た。集合地の西立川駅前に会員が大きな袋を下げて集まっています。会場に到着したころには晴れ間が出てきました。

さすが晴男、上田幹事長です。

さっそくレンタルのバーベキュー器具をセットし、スタートの「乾杯」をした。会員・友人二十一名が準備を始める。恒例の行事ゆえ、手慣れた手順で「野菜」「肉」「魚介類」「やきそば」が次々と焼かれ、皆楽しそうに箸をだし、「酒」を飲み交しました。「ビール」・「日本酒」・「焼酎」・「ワイン」飲みきれない量です。

すぐ隣のテントには、若手の後輩グループが家族づれで来ており、先輩・後輩の仲、すぐに合流。一緒に写真を撮ったり、齢のせいで、食べきれない食材を差し入れたり和気あいあい。

近況や海外旅行の話・ゴルフの話と和やかな懇親の時間が過ぎてゆきます。雨も降らず、楽しい時間も過ぎ、後片づけを終えて、集合写真を撮り、お開きとなりました。

(石井 孝)



# 秋の市民まつり

## 「磯辺焼き」

十二時半に完売

『笑顔があふれる市民まつり』と銘打った平成二六年「くにたち市民まつり」は、十一月一日から三日間連続開催の『天下市』(商工会青年部)と『一橋祭』(一橋祭運営委)に呼応して、十一月三日(休)、大学通りを歩行者天国にして三祭合同で盛大に行われ、十万人を越える来場者で賑わった。我が国立白門会も例年の通り、大学南門付近に二ブースを確保して、いまや市民まつりの名物ともなった『磯辺焼き』即席販売で参加した。

白門会会員はじめ夫人、支援者ら三十名ほどが参集、用意した五十キロの切餅を即製カマドの網に乗せ一枚ずつ丁寧に焼き、醤油味を付け海苔を巻いて三個人りケースで約三百ケース。午前九時半に販売開始して、たちまち十二時半には「完売」という嬉しい新記録。また会員有志から供出された婦人用衣類、退蔵されていた置物、雑貨類のほか、毎年人気の八ヶ岳産赤い唐辛子二百本等も合わせ販売し、目標をはるかに上回る販売額十五万円を記録した。(北井)



箱根駅伝予選会応援 2014.10.18 会場 昭和記念公園



市民まつりに参加 2014.11.3 大学通り

### 秋の一泊旅行

日本の文化を尋ねて

幕末の巨匠、雲蝶の彫刻  
新潟「どぶろく」博覧会

恒例の秋の一泊旅行は、十一月二十九日、会員・家族、それに石井さんの山の会会員など総勢二六人が参加して行われた。

朝八時貸切バスで大学通りポポロ前を出発、新潟県魚沼市を目指す。目的は、西福寺開山堂石川雲蝶作天井画彫刻見学、どぶろく博覧会試飲参加、和紙工房見学、柏崎市谷根川サケ遡上見学など。

南魚沼市そば処「田畑家」で名物のへぎそばで昼食をとり、西福寺へ。同寺は曹洞宗開祖道元を祀る。極彩色を施した雲蝶の天井の彫刻透かし彫りは、小規模ながら精緻を極め、一見に値する。雲蝶はルネサンスの巨匠ミケランジェロに擬して、越後のミケランジェロと呼ばれる。雲蝶が遊び心で施したという数十に及ぶ廊下の細かな埋木細工を確認しながら尋ねるのもおもしろい。

夕刻から、ホテル（ニュー・グリーンピア津南）の大広間会場ベガサスで夕

食と、どぶろく博覧会。どぶろくの蔵元が会場正面に勢揃いし、十七銘柄のどぶろくを披露。客に振舞い、客への土産に販売もした。「俺は全部平らげてきた」と公言する強者もいた。

夜は、別室で二次会。みんな思いおもいに雑談に花を咲かせ、声に覚えのある人はカラオケに興じた。

翌日は、ベガサスで朝食を終え、帰り支度をして、津南町と柏崎市を巡る。津南町で見玉不動尊に詣で、和製グランドキャニオンを川向こうに遠望した後、門出和紙工房を訪ねる。工房は生憎休日のため、和紙作り体験の予定を取り止め、作務衣を纏った小林康生工匠から口頭の説明を受ける。サケ遡上見学では、サケが急流を昇る姿や力尽きて擦傷の身を流れに横たえる様子などを散見。柏崎市みやこ屋で刺身御膳の昼食を終えて、帰りの途にいった。

帰りの道すがら、この地方特有の家屋の特徴が目が止まる。殆どの家の一階部分がコンクリート構造になっている。豪雪地帯ゆえ積雪に備えて一階部分を強化し、冬の人の出入りは二階から行う、とのことである。

振り返って、貴重で楽しい一泊旅行だった。このことは、帰りの車中で山

の会の代表の方が述べた謝意にも表れている。何時もながら、この案を企画された重野さん並びに、関係者との打ち合わせ等に労を取られた上田幹事長にお礼を申し上げたい。またこの旅を楽しくさせたのは、旅行業者の方々にも負う。添乗員の三田さんの説明はポイントを押さえて簡潔でムダがなく、旅の楽しみを倍加してくれた。また乗務員榎本さんの技能は見事で、狭い車中での疲れを全く感じさせなかった。

市川良夫 記



国立白門会「秋の一泊旅行」開山堂(H26.11.29)



石川雲蝶作『天井彫刻画』



国立白門会「秋の一泊旅行」ランドキャニオン津南(H26.11.30)

## 新年会 すばらしい歌声に陶醉

平成二七年の国立白門会の新年会は一月十八日(日曜日)「エソラホール」で開催された。

毎年のことであるが、設営担当の会員が定刻よりも早く集合して会場設営を行い、開場時刻の三〇分前には、準備が整っていることに、感謝するものです。有難うございます。新年会は、定刻三時に開催され平本副幹事長の司会のもとに、小島会長の挨拶、上田幹事長の活動報告、斉藤幹事の集合写真撮影の後、山口前会長の乾杯の発声で宴会が始まりました。

当日のアトラクションは、オペラ歌曲の鑑賞であった。ソプラノ歌手の志太美那さん、テノール歌手の鳥羽洋彰さん、そしてピアノは河合良一さんのトリオで「乾杯の歌」「TONIGHT」など、我々のよく知っている曲を歌っていただきました。鍛えられた音量に圧倒されました。特に素敵な志太美那さんがワイングラスを片手に「乾杯の歌」を歌いながら各テーブルを巡ったときには大

いに盛り上がりました。

また、当日はビンゴゲームによる賞品の抽選会を行い、会長賞、白門会賞に当たった会員、参加賞だった会員など、みんなで楽しみました。その間、料理と当会場のオーナーでもある関喜一会員のご配慮による多種多様なお酒を楽しみながら、談笑に花を咲かせ、時間の経つのも忘れるほどでした。今回は初参加の会員もあり、大盛況でした。

最後に、校歌、応援歌の斉唱のあと、堀田元会長の中締めによりお開きになった。  
山口康雄 記



## 中央大学学術講演会

### ビッグデータと個人情報保護

ー データ解析から明らかにされること ー

中央大学文学部教授

飯尾 淳

昨年十月十九日、「せきやビル・エソラホール」において、中央大学主催の学術講演会が開催された。

今回のテーマは、言葉としては知っているものの、その目的、特質、問題点について、よく理解されていない「ビッグデータ」について講演をいただいた。

「ビッグデータ」は文字通り膨大な量のデジタルデータのことだが、今日「ビッグデータ」と言った場合は、単なるデータの量の多さだけでなく、構造が複雑化し、リアルタイムの分析が難しい、従来の技術では管理や処理、さらには予測が困難だったデータ群を指す概念のようである。これらを先生はビッグデータの三つの特徴(3V)としてまとめている。1 大容量 (Volume) 2 多様性 (Variety) 3 スピード (Velocity) である。一番目の大容量については、今や社会、企業、組織のさまざまな分野でデータが生まれる。そのデータの保存を可能にするのは驚異的なコンピュータの記憶容量の進化である。二番目の多様性については「生活・行動情報」「インフラ情報」「医療・健康情報」「自然・科学情報」

など多岐にわたっている。三番目のスピードについては、リアルタイム性、すなわち、「すぐに反応すること、待ったなし」「様々なデータに応じて瞬時の判断が求められる」などである。これらの特性を踏まえ、現実はどう活用されているかをみる。私は近年オープンした近くのスーパーのポイントカードを持っている。たしか、取得するときに、住所、氏名、性別、生年月日などを記入したと思う。レジでポイントカードを差し出すと瞬時に私のコード番号に品名、数量などが記録される。それらのデータを集積することによって、誰が、いつ、どこで、何を買ったかが把握され、地域特性、年齢特性、季節特性、時間特性、さらには個人特性も把握される。これららのデータを使って、商品の売れ行き観察、誰向けに、どこで、生産調整、販売調整、誰向けに広告、などの強力な判断材料が得られるのである。ポイント還元はそのコストである。

一方、プライバシーにたいする配慮も懸念されている。今後の活用企業のモラル、セキュリティ対策など課題も多い。

堀田 勲 記

「くにたちまと火」

クリーン多摩川国立実行委員長

丸本 大

平成二十六年七月三十一日午後七時三十分、国立市多摩川河川敷に二百メートルにわたって、約六百個の火球が点灯された。夕闇の多摩川に初めて幻想的な灯が映え、千余名の見物人を魅了した。

国立市では、過去二十七年の間、北秋田市合川町と児童交流が行われていたが、平成十七年市町村合併の為、合川町との交流が中断された。

このたび、クリーン多摩川国立実行委員会の三十周年記念事業として、河川敷で何かイベントが出来ないかと検討していたところ、元合川国立児童交流会会員から、合川のと火の提案があり、委員会が調査することになり、昨年三月二十一日春彼岸の中日に合川でまと火が点火されるとの情報が入り、早速関係者五名が現地へ飛んだ。

積雪の風景の闇の中に点々と灯る火が、積雪に映え、部落ごとに違った火文字がすばらしく、幻想的であった。受け入れてくれた合川町の元児童交流会の有志と交流して、まと火を国立市で点灯することに快く同意して頂き、更に応援に来て下さることになった。

合川町では、春彼岸の中日には各部落の墓場やお寺の周囲で点灯し、夏のお盆には、迎え火とし

合同で「合川ふるさとまつり」を開催して、フイナールとして、阿仁川の土手二〇〇メートルにわたって、まと火を点火して、四十二回も実施され恒例の行事となっている。

まと火の起源は、江戸期に茨城から秋田に移された佐竹公と地元の旧藩士との争いで多くの犠牲者が出た霊を弔う為に火を灯したことから始まったといわれ、現在、阿仁川周辺の四十六集落で今も実施されている。

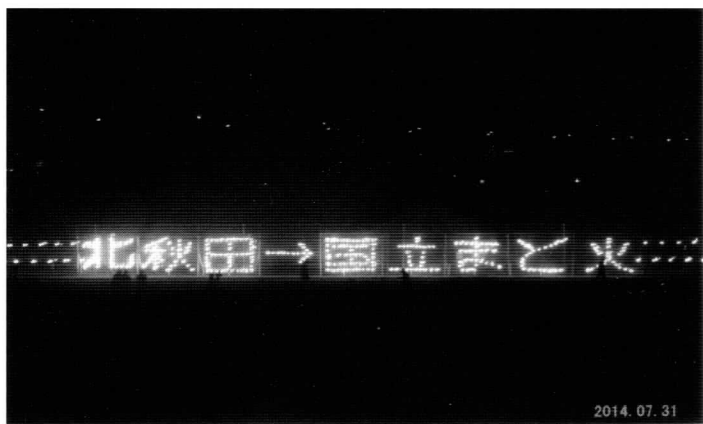
国立市の谷保地区では、八月一日・二日がお盆となっており、七月三十一日は迎え火となっている。国立市の住民にまと火を知って頂く上で、プレイベントを急遽実施することになり、「国立まと火実行委員会」が昨年四月に、早々に開催され、実施された。

まと火の球（ダンポ）作りには、木綿の生地を丸めて球状にする為、都会地では、材料集めが困難と思われたところ、市内の藤波タオルの会長より、産業廃棄物となっているタオル洗濯時に出る糸くずがあり、乾燥の為、球状に丸めているものが、ダンポの芯になることがわかり、外部に巻く布地も同時に頂けることで、無償の材料提供があり、五十パーセントの準備が出来ることになった。実行委員が知人や各種団体に材料を持参して協力を頂き、昨年六月末には五〇〇個以上のダンポが完成した。河川敷二〇〇メートルを使用する為、関係行政機関の協力をお願いし、実施することになった。

一方で資金の調達には、主に個人的な有志の協賛金をお願いしてまわり、公の資金支援はなく、好意を持って迎えて下さった団体や個人の方々のお世話で集めて頂いた。

開催日前日夕方、北秋田市からバス一台に合川の中学生と保護者並びにまと火保存会のメンバー計三十六名が到着し、南プラザに仮泊してもらい、当日午前中に、研修の為、立川の極地研究所と防災センターにご案内し、午後は現場で「北秋田↓国立まと火」の火文字の製作に従事して頂いた。一方、国立市では、第三中学校生徒が二十名合流して点火作業を協同で行った。

「国立まと火」開催に当り、市民



参加型のまと火イベントとなったが、短期日に実現出来たのは、善意の有志と無償の資材や物品の提供があったから実現出来、又ボランティアの作業に参加してくれた市民の総意の贈物であると思いい、市民協働の結果と感無量である。

今年は、本番を迎え、プレイベントの欠点を補い、多くの市民に楽しく参加してもらえ催しにしなければならぬ。

今年の実施日は七月十九日に開催します。点火前のイベントも企画しています。ご協力をよろしくお願い致します。

当会会員 藤井輝明氏  
一橋大学兼松講堂で講演

平成二十七年三月八日(日) 当支部会員の藤井輝明さんが一橋大学兼松講堂で「これからの医療について」のテーマで講演を行いました。

主催は公益社団法人東京都鍼灸師会、後援国立市、国立市教育委員会でした。藤井さんは二歳の時に海綿状血管腫を発症され、幼少の時から大変ご苦労されましたが、母親の愛情ある言葉に包まれて困難を跳ね返すとともにご自身の日々の頑張りとあり、医学博士になられました。今回は自らの経験を通して心あたたまる講演で、約三百名の聴衆者は熱心に聞き入っております。

上田邦雄 記

## 初心の感動 市橋千鶴子

つい最近耳にしたことであるが、松涛の観世能楽堂が、銀座の松坂屋跡地に移転することになったとのことである。

既に、六回に亘っての「さよなら公演」も終了し、昭和四十七年（一九七二年）四月の新築落成以来四十三年間、観世流の能を愛する多くの人々に夢を与えてきた松涛の観世能楽堂も、本年三月三十一日を以って閉鎖され、やがて取毀されることとなった。

観世宗家観世清和氏のお言葉によると、新能楽堂は、二年の歳月をかけて、銀座の松坂屋跡地を中心とする再開発地区に建設中の複合ビル内に移転することである。

加えて、元々銀座の地は、観世流の祖先が、三代將軍家光より拝領していた約五百坪の土地の存在したところであつて、能楽堂、屋敷、蔵を設け、歴代の將軍の愛顧のもとに能楽の大成に努め、明治維新に際し、土地は新政府に返還したものの、観世流にとつて銀座の地は、浅からぬ縁のある土地であるとのことである。

縁といえは、ゴルフプレイのし過ぎで膝を痛め、正座ができなくなったため、昭和六十三年九月、観世能楽堂で

舞囃子「砵」後シテを舞つたのを最後に、謡も舞も辞め、能の観賞も遠くなくなった。

そのような日常のなかで、毎朝、謡の一節を吟じ、能に関することとなると、黙つてはいられない衝動に駆られるには、つぎのような幼少時の、忘れられない思い出があるからである。

わが家の床の間には、物心ついて以来、弾かずの琴が立てかけてあつた。いわゆる、母の嫁入り道具のひとつである。

小学校の低学年のころ、放課後、琴の稽古にゆくという友人に同行して、結局、願ひ叶つて琴の稽古を始めることとなった。

その数年後、裁判官倶楽部の広間で琴の演奏会の催された折、演奏を終えて、一息つきに独り庭に出た折、聞き馴れない音声を耳にした。暗い庭伝いに覗いた別会場の一室に、数名の紋付き袴姿の威儀を正した男性の朗朗とした発声に、始めて耳にする不思議な魅力を感じて、暫くその場を動けなかつたことを、今だに昨日のよう

に覚えている。帰宅して父から、「それは恐らく裁判官の方々の、お能の謡ではないか。」という言葉によつて、生まれて始めて、お能とか謡なるものを知り、大人にな

つたら是非習得してみたいと、思い始めていた。これが、最初の初心の感動であつた。

さらに長じて、憧れの司法試験に合格し、民事修習の折、教官の配慮で、水道橋能楽堂に於いて能「隅田川」を観賞する機会を得た。幸運にも、人間国宝生九郎師の至芸に接してからというもの、幼少時からの願望を抑えきれなくなつていた。

弁護士登録後は、予想を超える忙しきで、稽古ごとどころではない日々を過ごしていたが、ある時、ある人のご縁で、観世流喜之家の師匠のもとで謡と仕舞の稽古を始め、月三回の稽古日が待ち遠しいほど謡も仕舞も楽しかつた。ところが、仕事の忙しさから予習も復習もできない俚に、段々節回し等が技巧に過ぎてついてゆけない思いにかられて悩み始めた。その道の先輩の友人に相談したところ、家元の指導はむしろ発声の基本にあることを教えられ、私は目の醒める思いであつた。

当該友人の紹介で、浅見重弘師の門を敲き、謡の基本からやり直す気持ちで、松涛の観世能楽堂に近い、宇田川町の浅見先生のお稽古場にせつせと通つた。

私が、松涛の観世能楽堂の、それこそ真正正銘の松舞台を始めて踏んだのは、能楽堂が、大曲から松涛の地に移転し、会館が落成した昭和四十七年九月のことである。

浅見弘諷会の秋季大会に於いて、素謡「小督」のワキを努めたが、それは正に、檜の香に噎せるほどの清々しい舞台上のことであつた。

さらに翌年の四月十五日には、春季別会に於いて、仕舞「班女」を舞い、その後も年に一度は松舞台を踏んだ。それまでは、観能といえは、矢来の能楽堂しか知らなかつた私にとつて、規模も格段に大きく、それこそ家元のお言葉にもある、「檜の粉が舞うほどの真新らしさ。」は格別であつた。

これが第二の初心の感動である。今日、年数を重ねたとは言いがら、落成後たかが四十数年にしか過ぎない会館を、防災上の理由から取毀しとは、まことに惜しまれてならない。まさに、能そのものの魅力、加えて観世能楽堂への愛着、何れも初心の感動から、この身に染みついた宝物のようなものである。

終りに「不可忘」即ち、初心忘るべからずとは、世阿弥著「花鏡」のなかの一言であることを付言して、稿を終ることとする。



## 「古事記」を旅する

〔奈良県・大和・飛鳥京〕  
重野和夫

この度は宮崎県に続いて、奈良県飛鳥を中心に、古事記にまつわる神社、陵墓、伝承地、および遺構などを検証して廻った。この地域は年代的にも、神話の世界から、そろそろ現実の世界へと変換し、天皇はじめ実在する人物が登場することに注目したい。

一・神武天皇誕生までの大まかな流れを知る

◆古事記「上巻」大和に政治の中心が移るまでのストーリーの概略。

世界の神話は、神による天地創造で始まるが、日本の神話はまず男女二人の神が登場して、天孫降臨する。伊邪那岐命、伊邪那美命は結婚して、淡路、四国、九州、本州を産み大八島という国土になる。次に天照大神、須佐之男命のスーパースターの神をはじめとして三十五柱の神々を生む。伊邪那岐命から六代目に登場する神倭伊波礼毘古命が、初代神武天皇になる。

神倭伊波礼毘古命は、九州の地は西に偏りすぎている。良い政治をす

るのには、中央に行かなければと兄の五瀬命と九州を出て海上を行く。途中の戦で、五瀬命は無念の戦死してしまふ。

十数年の年月をかけて三重県熊野付近に上陸する。ここからは、八腿鳥の案内に助けられるなど、難行苦行して紀伊半島を北上し、畝傍の白檜構原宮（現在の奈良県橿原神宮）に到着した。

ここまですべてが神武東征の物語で、ここで初代の神武天皇が誕生した。年号は不明だが、政治の舞台が、大和の地に移ったのである。「上巻」は、ここで終了する。天孫降臨からここまですべてが、古事記（神話）のハイライトといえるのではないか。

◆古事記「中巻」「下巻」高千穂神話のようなダイナミックな神話はない。「中巻」は、神武天皇から十五代応仁天皇まで、「下巻」は仁徳天皇から第三十三代推古天皇までの各天皇の主要な出来事を物語風に記述している。

「中巻」景行天皇のところでは、倭健命の東方征伐の物語がある。天皇は、西伐から帰ったばかりの弟倭健命に今度は、東方征伐を命じた。倭健命は悪戦苦闘して約束を果たしたが、帰路の途中で病気になるって亡くなってしまう。故郷に帰れず望

郷の念から歌を詠んだ。

倭は 国のまほるば たたなづく  
青垣 山隠れる 倭し美し

（倭の国は、素晴らしさに充ち 重なり合う山並み 青い垣根の山並みに 故郷倭はうるわしい）

【原文】夜麻登波 久爾能麻本呂婆  
多多那豆久 阿袁加岐 夜麻碁母礼  
流 夜麻登志 宇流波斯

二・古代国家の中心地奈良飛鳥京、古事記編纂を命じたとされる飛鳥浄御原宮跡、（伝 飛鳥板蓋宮跡）を訪ねる。

奈良市街から車で一時間三〇分ほどで天理市、桜井市辺りを行く。進行左側には、古代の国道「山辺の道」が続き、崇神、景行天皇陵、古墳群が姿を現し、三輪山が望めるのどかな田園地帯だ。更に南に下ると明日香村である。車を降りて、標識が示す細い道を行くと畠の中に伝・飛鳥板蓋宮跡があった。

一三〇〇年以上昔、ここが天皇の居所、日本の政治の中心地で、大宮人が行き交う場所であったとは、想像が出来ない。その場所は、綺麗に公園化されて、場所の故事を示す看板が立ち、のどかな田園の中に飛鳥寺、橘寺、甘樫丘が見渡せた。誰もいない静かなひとときは、想像を豊にする絶好の機会であった。

自分は、いま古事記を念頭にこの地に立っている。古事記に示される事柄は、歴史的、考古学的、科学的あるいは文学的にすべて実証されることは難しい。歴史は、いつの時代においても、一つの出来事、事実や見聞の上に、想像を組み立てることによって、その時代が現在に蘇ると思っている。礎石の上に、知りうる英知を働かせて、いかようにも構築できるところが、歴史の面白さではないか。



伝・飛鳥板蓋宮跡

(一) 飛鳥板蓋宮から、大化の改新が始まった。

伝・飛鳥板蓋宮跡の周辺には、推古天皇から持統天皇に至る一〇〇年

間、飛鳥岡本宮、飛鳥板蓋宮、飛鳥浄御原宮など歴代天皇の都があったとされるが、個々の位置は明らかでない。昭和四〇年代後半に発掘調査した結果、遺構や、木簡、土器の出土遺物から、そこが七世紀末の宮殿、飛鳥板蓋宮跡と推定された。下層にも遺構があつて宮殿が重なっている

とされ、古事記編纂を命じた飛鳥浄御原宮ではとの期待が膨らむ。今後の調査を期待したい。

飛鳥板蓋宮では、六四五年六月十二日に朝鮮三韓の使者と皇極天皇の儀式が行われ、宴の席になった時に中大兄皇子と中臣鎌足は、有力豪族の大蘇我蝦夷を殺害した。結果、父の蘇我蝦夷も自宅に火を放つて自害した。この結果、律令制に基づく中央集権国家を目指した、大化の改新が始まった。

### (二) 天武天皇と額田王ぬかだのおおみのロマン

大化の改新の立役者、中大兄皇子は後に天智天皇になり、弟に大海人皇子(古事記編纂する後の天武天皇)がいた。この時代、男性が成人(元服)に達したときに年上の女性を選ばれる、「添え臥し」として、十九歳の額田王が大海人皇子のお妃に選ばれたとも考えられる。

二年後、六四八年大海人皇子との

間に十市皇女が誕生した。その後、額田王は兄天智天皇の妃になつてしまふ。万葉の歌人として存在感を高めていき、額田王四十歳頃の作品として、万葉集に広く知られている次の歌がある。

茜さす 紫野行き 標野行き  
野守は見ずや 君が袖振る

(万葉集巻第一)

(あかねさす紫草の生えている野を歩き、狩り場の標(しめ)を張った野を散歩している私に、あなたは袖をお振りになられています、野の番人に見つかってしまいませよ。)

手を振つたのは、前夫の大海人皇子であった。彼は、単刀直入に次のように返歌している。

【返歌】 紫草の 匂える妹 憎くあらば 人妻ゆゑに われ恋ひめやも

(紫匂う あなたが憎かったら 人妻なのに恋慕ったりしませよか)

この他、額田王は、  
君待つと わが恋ひをれば わが  
屋戸の すだれ動かし 秋風の吹く

(万葉集巻第四)

(あなたをお待ちして、恋しく思っていると我が家の簾を動かして、秋の風が吹いてきた)

この歌は、天智天皇の訪れを待つ、しつとりとした女の感情がにじみ出ていると思う。

天智天皇は、後継者を大海人皇子ではなく、我が子の大友皇子にすると言ひ出す。大友皇子には額田王の娘、十市皇女が妃になつていた。皇位継続で争いが起こつてしまった。これが古代最大の内乱「壬申の乱」である。一ヶ月の戦いで、二十五歳の大海人皇子は、破れ自害してしまふ。その結果、大海人皇子が天武天皇として即位した。この後、失意の中で十市皇女が急死してしまい、続いて万葉の歌人、額田王の活動もみられなくなつてしまった。

### (三) 天武天皇と古事記編纂

古事記を草案した本当の心は、どこにあったのだろうか。天武天皇を中心とした貴族、官僚による中央集権国家を目指したことは確かであろう。また、一説によると飛鳥板蓋宮で蘇我蝦夷が殺害されたことに憤慨して、父蝦夷は自宅に火を放ち、自害してしまふ。この時、保管していた天皇や朝廷の歴史書が消失してしまい、大事な「国記」「天皇記」を直ちにつくる必要があつたという見方もある。天智天皇は、白村江の戦いの敗北、九州に防人を置くだり余裕がなかつたとも云われる。唐の正史にならつて、日本でも国家の歴史書が必要であつたであろう。

しかし、太安万侶が記した古事記



序文には、壬申の乱の経緯と凱旋にふれ、英邁なる君主天武天皇の功績が格調高く語られている。さらに天武天皇は次のよう語ったと書かれている。

【原文】 於是天皇詔之、朕聞、諸家之所責 帝紀及本辞、既違正実、多加虚偽。

「私が聞くとところによると諸氏が所有している帝紀（天皇家の即位から崩御まで記したもの）や本辞（氏族の系譜、神話、歌謡の伝承）等が既に事実と違っている。かなりの虚偽が加えられてしまった。ここで、誤りを正し事実を記録した書を作成しておかなければならない。」

そして、正しい記録を作るために、稗田阿礼を選んだ訳を、古事記序文では次のように書かれている。

【原文】時有害人。姓稗田、名阿礼、年是廿八。為人聡明、度目踊口、弘耳勤心。

「時にとねりありき。姓は稗田、名は阿礼、年は二十八歳。聡明な人物で、一目見れば、暗唱し、一度聞けば記憶する能力がある。」

さつそく稗田阿礼を詳しく知るために、賣太神社を訪ねることにした。

### 三、稗田阿礼を主祭神とする賣太神社

賣太神社は、大和郡山市でも規

模の大きい稗田環状集落の中にあつた。環状集落とは、奈良地方には二〇〇位あるが、戦国時代自衛のために、村落の周囲が濠で囲まれている集落のこと。

賣太神社には、天の岩戸で踊った天受売命（天照大神を天の岩戸から出すため踊った神）と猿田彦命（天孫邇邇芸命が高天原から日向の高千穂に降臨するとき道案内した神）も副祭神としていた。



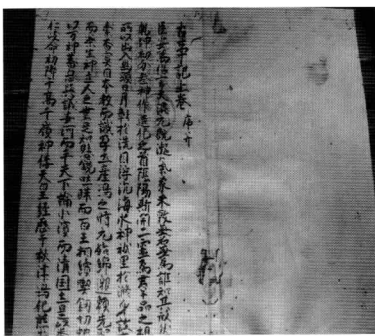
稗田阿礼を祀る賣太神社

宮司に会って神社の由緒略歴、稗田阿礼について聞こうとしたが不在なので、宮司の奥さんから話を聞き、賣太神社に江戸時代から伝わる古事記の写本等を見せていただいた。二〇一三年（平成二十五年）は、古

事記が完成されて一三〇〇年目にあたり、毎月古事記の学習会、阿礼に関わる各種イベントがあったという。

さて、稗田の地は、古代より天受売命を祖先に持つ、猿女君稗田氏の居住地であった。稗田阿礼は、天受売命の子孫。天武天皇は、「帝紀、本辞を勅語として誦み習はしめ」とあるので節をつけて歌うようにして語られたのではないか。その伝承こそ聡明な稗田阿礼の仕事であったと思われる。残念なことに天皇は、この後崩御され伝承のまままで終わってしまった。

それから三十数年後、女帝元明天皇になり、都は飛鳥宮から平城京に移る。和銅四年九月天皇は、太安万侶に稗田阿礼の覚えていたことを記録するように命じた。この時、稗田阿礼は既に六十歳くらいになっていた筈である。



賣太神社に残る古事記

### 四、太安万侶の墓を訪ねる

太安万侶は、どんな人物であろうか。一九七五年（昭和五十四年）遺骨、墓誌にみる銘文が発見された墓を、訪ねることにした。

賣太神社で聞いてもカーナビで調べても正確な場所は不明であった。取りあえず奈良市田原町の中学校を目標に、近くまで行ってからあらためて調べることにした。

予想通り地元で聞いてすぐ判明した。墓は里山の山深い場所の、南面に開けた斜面の茶畑の真ん中にあり、急斜面の畑道を登って行くと「史跡・太安万侶墓」の墓石と直径四、五Mの円墳があった。標識がなければ、気づくことは難しいだろう。発見の経緯は、茶の木の植え替え中に、掘った穴の中から、木炭と一緒に短冊形の銅板墓誌と、火葬された教センチの骨が発見された。太安万侶の墓と分かり、日本中の大ニュースになったことを記憶している。墓誌には、次のように書かれていた。

左京四条四坊従四位下勲五等太朝臣安萬侶以癸亥年七月六日卒之養老七年十二月十五日乙巳

（左京の四条四坊に住み、従四位下勲五等の太朝臣安萬侶は養老七年七月六日に没した）

太安万侶は、今も残る「奈良県田原本町多」という地の太(多)氏の出身とされる。父は壬申の乱で活躍した太品治とみられる。



太安万侶の墓 (奈良市田原町)

太安万侶は、稗田阿礼の言葉を、漢字の音訓を使って日本語の言葉として書き表したが、その作業が如何に困難であったかは、歴史発見の旅(宮崎編)で述べた通りである。

元明天皇が、太安万侶に古事記の編纂を命じてから、約二年後の和銅五年一月二十八日(七十二二年)「太朝臣安万侶元明天皇に献上した」と記されている。

五. 天武・持統天皇陵

壬申の乱(六七二年)に勝利した天武天皇と、そのお妃で次に即位した持統天皇は、天皇として初めて火葬にされた。二人仲よく合葬されている御陵を参拝した。小高い丘の墳墓は木々に覆われていたが、周囲は果樹畠に囲まれ霧囲気は明るい。鎌倉時代に盗掘された記録がある。石室は二つで、天武天皇の夾紵棺と持統天皇の金銅製の骨蔵器が治められているという。



天武・持統天皇陵

六. 変幻自在に姿を変える三輪山の  
大物主神

古代の幹線道路といわれる、「山辺

の道」を行くと、のどかな田園の中に三輪山(四六七m)がどっしりと威容をもって眺められた。全山が杉や松などの木々に覆われて、太古から神が鎮座する聖なる山と仰がれてきた。大国主命が自分の魂を大物主神の名で三輪山を鎮めたとされ、三輪山は、大神神社のご神体になっている。



大神神社拝殿

大神神社は、伊勢神宮、出雲大社に続く古代からの神社である。荘厳な拝殿や広い境内の霧囲気に、参拝者はパワースポットとして、心が引き締まる思いであろう。

古事記の「中巻」、第十代崇神天皇は実在性が高いといわれるが、その御代に三輪山の大神主神が登場する。疫病が流行って、死者が国中にあふれた。天皇は夢に出た大神主神の云う通り、大神主神を三輪山に祀った。すると疫病が止み、再び平和が戻ったという。

また、大物主神は、姿を見せず変幻自在に姿を変え、若い女性を虜にする。次の物語がある。

活玉依毘売は、容姿端麗な美人だった。ところが夜中になるとスーと音も立てずに寝室に忍び込んで来る者がいた。見れば、容姿や態度も素晴らしい男性で、二人は一目で相思相愛になってしまい、親に分らないように一緒に寝るようになった。まもなく活玉依毘売は、妊娠した。

姫の体の変化に気づいた両親は、「お前は妊娠しているようだ。夫もいないのに、どうして・・・」と問い詰めると「すごく素敵なお方が現れて、名前は知りませんが毎夜、私の所に通ってくるのです。一緒に過ごしているうちに身ごもってしまったのです」と姫は答えた。

両親は、男が誰であるか知ろうと思って姫に「赤土を床にまき、糸巻きに巻いた麻糸を針に通して、その

針を男の衣の裾に刺しておきなさい」と教えた。

姫は、その通りにして、次の朝見ると、糸は戸の鍵穴を通り抜けて、外に出ていた。糸巻きには三輪の麻糸だけが残っていた。男が鍵穴から抜け出していることが分かった。糸の後をたどっていくと、三輪山に至り神社で終わっていた。そこで懐胎したのは神の子であったと分かった。三輪神社は、本殿はなく拝殿の奥の鳥居を通して三輪山を直接拝むようになっている。姫の刺した麻糸は、その先の鬱蒼と木々に覆われた彼方に消えていったのであるうか。

この他に、大物主神は姿を見せず、丹塗りの矢になってたり、蛇になったり、変幻自在に姿を変え、若く美しい女性との愛の物語を演じてくれます。この物語の先は、古事記、日本書紀に譲りたいと思う。

今回は「出雲の旅」から、出雲神話編として須佐之男命、大国主命の活躍、八岐大蛇や出雲風土記に描かれる大穴持(大国主命のこと)の活躍やロマンについて述べてみたい。

参考資料「古事記」平凡社監修 千田 稔  
「古事記」角川学芸出版

### 国立白門会に入会して

石田 進

国立白門会のことは以前から存じ上げておりましたが、国立市民でない私に関係のない存在と思っていた。しかし昨年春、公民館に小島会長と上田幹事長が資料印刷に来館されました折、「そういえば館長も白門だったな」と会長の一言をきっかけに話が弾み、本会の活動をお伺いし、幹事長から「ぜひ入会してよ。楽しいよ」と熱心にお誘いいただきました。

初参加の総会懇親会では自己紹介させていただき、その後二次会、三次会へと遠慮なく交流させていただきました。昭和記念公園の納涼会バーベキューでは段取りと手際の良さに驚きました。晴天の下、賑やかで楽しい一日を過ごしました。

秋の市民祭りでは磯部焼きと客寄せの掛け声、ご婦人方も含めたチームワークの良さに感服しました。

限られた行事からの印象ですが、気さくで親しみ易い雰囲気と暖かな優しさに触れることができました。勝手ながら随分以前からお付き合い合っている居心地の良さを感じ、質実剛健だけでなく家族的情味の校風をしっかりと引き継いでおられます。

早いもので一年を経過しますが、まだまだ分からないことばかり、引き続きご指導ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

### 東京湾遊覧と地域貢献

国分寺サイトジム 斉藤 寛

五年ぶりでファンンの要望に答え、屋形船による東京湾遊覧を実施しました。当日は快晴で波も静かで最高でした。船内は四〇人弱の老若男女で大賑わい。揚げたての天ぷらを頂きながら飲めや歌えの大宴会となり、この不況を連打した感じでした。

船上からの眺めはマンハッタン並みで、約二時間半の親睦会があつという間でした。



第16回国分寺サイト-ボクシングジム洋上親睦会  
平成26年10月12日(日) 屋形船「むつみ丸」にて 参加者35名

また、国分寺市制五〇周年を記念した「国分寺まつり」に参加しました。「武蔵国分寺跡」広場の特設会場です。市からの要請により、国分寺サイトジムのアマ・プロのトレーナーのスタッフ達が参加、協力しました。当日は、子供達はもとより大人(特に女性の多いのに驚きました)を相手にシャドウボクシング、縄とび、ミット打ち等を指導し、大いに盛り上がりました。



平成 26 年 11 月 2 日  
国分寺まつり

### 親睦ボウリング会に参加して

前嶋 清

九月一七日、立川スターレーンで親睦ボウリング大会が開催されました。十名が参加し午後四時スタート。若者達の集まるボウリング場に初老の紳士集団は多少違和感がありますが、若い頃を思い出して先ずはボールを選ぶ。昭和四七年卒の私が駿河台に通っていた頃はボウリングブームのピーク、早起きしては新宿で途中下車し早朝ゲームに通ってました。その頃を思い出しながら、気合いの第一投は九のスペアーと上出来。第二フレームはなんとストライクが決まり、このゲームは一四七の好成績で終了。しかしツキもここまで、二回目は低迷、トータル二六八で終了しました。

初参加ながら見事優勝でき、豪華賞品を頂いてしまいました。表彰式終了後は「成績検討会」という名の美酒に酔い、先輩諸氏と健闘をたたえ合い、大いに盛り上がりました。

### 平成26年度 国立白門会決算書

自 平成26年4月1日

至 平成27年3月31日

単位:円

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
年会費	204,000	195,000	印刷費	84,069	100,000
総会費	112,000	120,000	総会費	147,802	200,000
行事活動特別収入	390,634	160,000	事業活動費	63,486	100,000
寄付・祝金	116,000	60,000	親睦行事費	461,306	200,000
学術講演会	200,000	200,000	通信費	43,793	50,000
支部活動強化費	110,000		会議費	23,037	35,000
雑収入	9,146		事務用品費	10,048	20,000
前年度繰越金	281,110	281,110	学術講演会開催費	209,574	250,000
			雑費	21,910	15,000
			予備費	0	46,110
			次年度繰越金	357,865	
合計	1,422,890	1,016,110	合計	1,422,890	1,016,110

平成27年4月20日

会計 下村俊郎 印

会計監事 二宮 巍 印

### 平成27年度 国立白門会予算案

自 平成27年4月1日

至 平成28年3月31日

単位:円

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×65	195,000	印刷費	白門会ニュース他	80,000
総会費	4000円×30	120,000	総会費		130,000
行事活動特別収入	さくら祭、市民祭	180,000	事業活動費	近隣支部総会祝金	80,000
寄付、祝金		80,000	親睦行事費	納涼会・新年会他	450,000
学術講演会	中央大学	100,000	通信費	会員連絡他	30,000
支部強化費	中央大学学員会	100,000	会議費	役員会他	30,000
			事務用品費		20,000
前年度繰越金		357,865	学術講演会開催費		220,000
			雑費		20,000
			予備費		72,865
合計		1,132,865	合計		1,132,865

平成26年度活動報告 26・4・1~27・3・31		平成27年度活動計画案 27・4・1~28・3・31	
* 4/ 6(日)	「さくらフェスティバル」に参加	* 4/ 5(日)	「さくらフェスティバル」
* 6/15(日)	第37回定時総会「エソラホール」	* 6/21(日)	第38回定時総会「エソラホール」
* 7/21(月・祝)	納涼会「昭和記念公園」バーベキュー	* 7/19(日)	国立まと火に参加
* 7/31(木)	国立まと火に参加	* 7/20(月・祝)	納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
* 9/17(水)	ボーリング会「立川スターレーン」	* 9/12(土)	ボーリング会「立川スターレーン」
* 10/13(月・祝)	「くにたちウオーキング」	* 10/12(月・祝)	体育の日「くにたちウオーキング」
* 10/18(土)	箱根駅伝予選会応援	* 10/17(土)	箱根駅伝予選会応援
* 10/19(日)	学術講演会「エソラホール」	* 10/18(日)	中大学術講演会「エソラホール」
* 10/26(日)	ホームカミングデーに参加	* 10/25(日)	ホームカミングデー
* 11/ 3(月・祝)	「くにたち市民まつり」に参加	* 11/ 3(火・祝)	「くにたち市民まつり」に参加
* 11/16(日)	秋のクリーン多摩川	* 11/	秋の旅行 (詳細未定)
* 11/29(土)	秋の一泊旅行 (津南町)	* 11/15(日)	秋のクリーン多摩川
* 1/18(日)	新年会「エソラホール」	* 1/17(日)	新年会
* 1/26(月)	武蔵五日市七福神めぐり	* 3/13(日)	春のクリーン多摩川
* 3/15(日)	春のクリーン多摩川		
○ 白門会ニュース48号発行		○ 白門会ニュース49号発行	
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催		○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催	